

二〇〇四年二月五日③
『直立歩行 進化への鍵』

クレイグ・スタンフォード著

長野敬+林大訳

青土社・二五〇円

ISBN9784791761487

科学・生物

生きるだけなら生きられる。情報も快樂もちよっとコンピュータの画面をクリックすれば得られる。そんなふうに生存条件に関する苦しみが消えたときに、生存そのものの苦しみが露頭してくる。

龍樹はブツダのシンプルな教えを、より精緻（せいち）に説き直した。ブツダの言葉が、あまりに無駄がな過ぎで、いろいろ誤解をする人々が増えてしまったためだ。

彼は、すべての生存（有）は幻や陽炎（かげろう）のようなものであることを論証した。幻といっても虚無ではない。ただ実体ではなく、無常であり、要するに人が執着すべき対象ではないというのだ。

龍樹といえば『中論』が有名だが、本書では『六十頌如理論（ろくじゅうじゆにりょう）』という大切な著作も詳しく取り上げられている。瓜生津は『六十頌如理論』研究の権威なのだ。

龍樹の優れた評伝には中村元『龍樹』（講談社）があるが、本書の方がわかり易（やす）い。究極の個人主義から発出した仏教者が、いかに自利利他の実践（菩薩（ぼさつ）道）に入るかが丁寧に描かれているのも特色。

絶望を経て希望に、利己を経て慈悲に向かう一つの道がここにある。

評・宮崎哲弥（評論家）

うりゅうず・りゅうしん 32年生まれ。京都女子大

前学長。同大名譽教授。仏教学。

悠久の時間の産物としての二足歩行

かつては恐竜にも二足歩行を得意とするものがいた。短時間短距離ならチンパンジーも立つて歩ける。だが、ヒトのように長時間にわたり、効率的に直立歩行できる生物種は他に存在しない。

ヒトをヒトたらしめたのは直立歩行だった。自由になった手で道具を操り、脳の発達にも大きく貢献したからだ。だが、直立歩行への進化の因果律は今なお多くの謎に包まれている。

本書はさまざまな学説、研究データなどを紹介しながら、その謎に分け入る。ユニークなのは、「ただ一つの理由で、あるいはただ一つのステップで二足歩行が現れた」という観念を振り捨てることだ」と説いている点だ。

こんなシナリオがある。環境の変化で森林が減り、サヴァンナ（草原地帯）が増えた。サヴァンナに出たヒトの祖先（サル）は周囲の安全を確認したり、遠くの獲物を見渡したりするために、すつくと立ち上がり、やがて二足歩行を得意とするようになった……。

だが著者は、今は「ヒトの進化の決定的な段階は、サヴァンナではなく森のなかで繰り広げられた」との説が有力と強調する。果実を手取るため、枝の上に立つ。実がなくなると地上に下りて別の木に移り、まずは低い実に手を伸ばす。こうした行動は完全な直立歩行ではないが、原型ではある。同じような行動が「何百万回も繰り返されれば、祖先には利用できなかった食料資源を利用できる類人猿の系統が自然選択で有利」になり、同類他者に差をつけたとも考えられる。

「肉食」がヒトへの進化に大きな影響を与えたとの指摘も興味深い。直立歩行し、道具を使うようになった祖先は、肉を好んで食べるようになった。栄養の収支は大きく改善され、脳の拡大につながり、知能の発達にも貢献した。狩猟生活への移行には、「心身の設計」を変化させる壮大な物語が潜んでいたのである。直線的ではない。むしろさまざまな伏線が試行錯誤を経ながら、進化の推力となる。「二足歩行は、数百万年かけて形づくられた手の込んだ芸術作品」という著者の修辭が説得力を持つてゐる。

（原題）UPR/GHT: The Evolutionary Key to Becoming Human）

評・吉田文彦（本社論説委員）

Craig Stanford 南カリフォルニア大教授。J・

グードール研究センター共同所長。